

聖書：Ⅱサムエル 13：1～39

説教題：アムノンとアブサロム

日時：2018年8月12日（夕拝）

この章でダビデの家に恐ろしい事件が続けて起こっています。大きく2つの出来事が記されています。一つ目はダビデの子アムノンによる異母姉妹タマルの陵辱です。ダビデには多くの妻たちがいましたが、3章にリストがあったように、アムノンはその中の長男でした。彼は腹違いの子で、ダビデ家の三男に当たるアブサロムの妹タマルに恋をします。しかし兄弟同士では結婚ができず、アムノンは恋煩いのために朝ごとにやつれていく状況でした。そんな彼に友人ヨナダブが悪知恵を吹き込み、アムノンは仮病を使ってタマルの手から病人食を食べさせてもらいたいと願います。そしてタマルがやって来て食事を作ってくれて、他の人が誰もいない状況を作ってアムノンは彼女に乱暴します。タマルは「イスラエルでは、こんなことはしません。こんな愚かなことをしないでください！」と必死に抵抗を試みましたが、アムノンに力づくで辱められます。決してあってはならない恐ろしい事件が起こってしまいました。

驚くべきはアムノンのその後の行動です。15節に「アムノンは、激しい憎しみにかられて、彼女を嫌った」とあります。日夜タマルを慕ってノイローゼになっていた彼が、彼女を無理矢理自分のものとした後、一転して彼女を嫌う。ここにもいかに人間の恋愛感情は不安定なものであるかを見させられます。彼のタマルに対する恋の感情は愛ではなかったのです。今日もこのような一時的な感情を純粋な愛と錯覚することによって、何と多くの人々が互いに捨てたり、捨てられたりして、傷つけ合っていることでしょうか。アムノンは彼女を追い出します。先にしたことも赦されない大罪だが、このようにして放り出すなど、もっとひどいことだ！とタマルは訴えますが、アムノンは聞く耳を持ちません。タマルは身も心もボロボロの状態にされて外に放り出されます。まだ若くて人生はこれからの彼女が、この時点で一生を台無しにさせられます。彼女は19節で「頭に灰をかぶり、身に着けていたあや織りの長服を引き裂き、手を頭に置いて、泣き叫びながら歩いて行った」とあります。ダビデは事の一部始終を聞いて激しく怒るも、それ以上の対処を何もしません。タマルの兄アブサロムは怒りを隠し持ち、このことについて何も言わず、アムノンへの憎しみを増幅させていたことが22節に書かれていま

す。これが一つ目の事件です。

2つ目は23節以降です。満2年が経って、アブサロムは羊の毛の刈り取りの祝いをするために王とその息子たち全部を招こうとします。ダビデはアブサロムの重荷となっ
てはいけないと言い、結果的にダビデの息子たちが皆で出かけます。そして彼らに食べさせ、酔わせた上で、アブサロムは若い者たちに命じてアムノンに2年前の復讐をします。この事件についてのニュースが間もなくダビデのところに届きます。初めはダビデの子全員が死んだ！という誤報が届きましたが、先に悪知恵を吹き込んだヨナダブが「死んだのは長子アムノンだけだ。アブサロムは彼を狙っていたのだ。」と言います。そしてやがて他の子どもたちがダビデのところに到着し、36節にある通り、声をあげて泣きました。「王もその家来たちもみな、非常に激しく泣いた」とあります。アブサロムはこの結果、母方の実家ゲシュルの王アミフデの子タルマイのところへと逃亡します。こうしてダビデはアブサロムともバラバラの関係になってしまったのです。

一体この記事は何なのでしょう。肉欲、悪知恵、強姦、憎しみ、暗殺、……。この章にはどこにも主のお名前が出て来ません。書かれているのは人間が犯した恐るべき罪とその悲惨な結果の羅列です。サムエル記の著者はこのようなことを長々と記して何を言いたいのでしょうか。私たちはここから何を学び取れば良いのでしょうか。実はこの章を読み解くカギは前の章で与えられていました。主は預言者ナタンを通して、バテ・シェバとの姦淫の罪を犯したダビデに12章10～12節でこう言っていました。「『今や剣は、とこしえまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしを蔑み、ヒッタイト人ウリヤの妻を奪い取り、自分の妻にしたからだ。』主はこう言われる。『見よ、わたしはあなたの家の中から、あなたの上にわざわいを引き起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で奪い取り、あなたの隣人に与える。彼は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。あなたは隠れてそれをしたが、わたしはイスラエル全体の前で、白日のもとで、このことを行う。』」ここにダビデが犯した姦淫と殺人の罪に従って、彼の家にも同じようなことが起こると言われていました。そのことがまさに今日の章に起こり始めたということではないのでしょうか。確かに今日の箇所で辱められたのはダビデの妻ではなく娘のタマルでした。ダビデの妻たちについて言われていることは、後に文字通りに成就します。しかし性的な罪という点では同じです。その主が宣告されていたこと

が現実化し始めたというのがこの13章を読む基本的視点ではないでしょうか。

ここから2つのことを考えたいと思います。一つは、これらはダビデが犯した罪に対する刈り取りの一部であるということです。ガラテヤ人への手紙6章7節：「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。」ダビデにそれほどどのような仕方でなされたのでしょうか。それは何と自分の子どもたちが自分の悪をそっくりそのままコピーすることによってでした。長男アムノンは妹タマルを力づくで辱めましたが、これはダビデがバテ・シェバとの間に犯した姦淫の罪に対応します。また三男アブサロムは、妹が凌辱されたために長男アムノンを暗殺しましたが、これはダビデがバテ・シェバの夫ウリヤを殺した罪に相当します。自分が犯した「姦淫」と「殺人」の罪が、自分の子どもたちによってこのようにコピーされ、再現されている。ダビデはそこに自分自身を見させられています。ですから怒っても毅然とした態度を取ることができません。蛙の子は蛙。ダビデの息子アムノンとアブサロムには、父ダビデの悪がそのまま鏡のように現れていました。ダビデは自分勝手な行動によって他人の家を破壊しましたが、今度はそれと同じ自分の息子たちの罪によって、自分の家庭が破壊されようとしていたのです。

ある人は随分厳しいと思うかもしれません。またダビデは前の章で悔い改め、主から赦しを受けたのではなかったかと思うかもしれません。確かにそれはその通りです。しかしそれですべてが水に流されて何事もなかったら私たちは罪を軽く考えるようになるに違いありません。罪を犯しても、また悔い改めれば何事もないと考えて、罪を犯すことに無頓着になりかねません。ダビデはすでにバテ・シェバとの間に生まれた子どもが死ぬという報いを受けました。しかしそれで終わりではなかった。さらなる刈り取りが彼の人生に臨み始めたのです。それは自分が犯した罪はどのようなものであったかを彼自身が一層深く味わうためです。他人に対してしたことが自分の家に対して起こり、自分の家がメチャクチャになることによって初めて自分のした悪の何であるかに目が開かれる。そのことを考えると、罪を犯すことの代償は何と大きいと言うべきでしょうか。ですから私たちは自分の歩み方に注意しなければなりません。悔い改めれば赦されると言っても犯した罪の刈り取りはあるのです。ダビデの苦しみはまだ続きます。ですから侮ってはならない。罪の道は行かない方がいい。一時の罪の楽しみと引き換えにど

んなに大変な苦しみが後ろに待っているかということ、私たちはこのような箇所を嫌がらずに読んで学ばされるべきではないでしょうか。

もう一つ今日のみことばから考えたいことは、だからと言ってここには悲惨しかないのではないということです。確かにここには最悪の出来事が連続しています。まるで地獄のような毎日です。しかしこれらの出来事の上にあってすべてを支配しておられたのは、先に見ましたように主なる神です。主のお名前は一度も出て来ず、主は不在のように思われましたが、この章の出来事は 12 章 10～12 節で見た主の宣告の成就でした。すなわちすべての上にあって事を導いていたのは主ご自身でした。そしてその主は確かに、確かにダビデを赦してくださった主です。だからと言って、それですべてが御破算となり、ハッピーな状態になるわけでないことは先に見ました。しかしこの恐ろしいサムエル記第二 13 章の出来事は、ただ訳の分からない混乱状態というのではなく、むしろ主が支配しておられる主のコントロール下にあることだと知ることは、苦しみの中でも、これを知る者に慰めを与えるものではないでしょうか。今日の章に書かれていることは決して私たちが望むような出来事ではありませんが、それでもすべての上にあって導いておられる主は、赦しを宣言してくださった主です。その主は何か良いお考えを持っていてくださるに違いない。この厳しい出来事を通して何か大切なことを教え、御心にかなうことを行なってくださいに違いない。その詳細が見えているわけではありませんが、この混乱の中で主権を持って導いておられるのは神であると知ることは、ここを読む私たちにとっての希望ではないでしょうか。

私たちの生活にも色々な混乱があるかもしれません。この章と同じく、まるで主はそこに不在であるように思われる時があるかもしれません。自分が犯した罪の刈り取りばかりがある毎日のように思うかもしれません。しかしそのような時も、その最も高いところに主がいてくださることを覚えたいのです。ですから私たちは主の御前に犯した罪の告白をなし、悔い改め、罪の赦しを得ているなら、希望をもって主を見上げたいと思います。主がご自身の御心に従って良いように導いてくださいます。厳しい訓練のコースを通らされるかもしれませんが、そのことを通して主が私を教え、聖め、造り変えてくださる。その主がおられることをどんな状況でも見上げて、心強くされたい。今の私にすべての出来事の意味は分からなくても、主こそあらゆる出来事の上にあって支配

し、コントロールしておられることを仰いで、私を赦し、受け入れてくださった方のあわれみの導きを待ち望んで、主の前にへりくだって従う歩みを続けて行きたいと思えます。